2098 年のキス

2013 年の現在、首都・東京などでは特に気軽な男女のキスが一目も憚らずに行われる事が少なからずあるらしい。これは今からもう少し前から見られる現象で、欧米の影響だといえるのだろう。

それと並行するように日本では、少子化が進んでいった。

2098 年の現在、日本でそのような行為、すなわち、人前でキスをする事は公然わいせつ罪として逮捕されるようになった。その理由は、おいおい述べていく事とする。

他の現象としては、映画やテレビドラマなどは見る人も極めて稀となっているのだが、キスシーンはアダルトなものとして取り扱われ、テレビからはキスシーンが姿を消すなどしている。

ここまで取り締まられるようになったなどは、2013 年に生きているあなたがたには時代の逆行のように思われるに違いない。

さてさて、そういう時代となっているから 2098 年現在、女性は外出時にはマスク着用が一般となっている。日本政府としても、マスク着用を義務付けようかという検討もしたが、中東の女性とは違う伝統のためにそこまではやらない方がいい、ということになり、法的に規制はされない。

それでも、大抵の女性は外出時、のみならず勤務時間帯もマスクを取らない。

ある平凡なサラリーマン家庭を見てみよう。女性は、その辺を歩いているような、よくみかけて顔も覚えられないよ

うなありきたりの三十代の主婦、凡子は帰宅した夫、沙羅男(さらお)にマスクをしたまま、

「会社の方は、どうなの?」

と聞く。

「ああ、なかなか出世できそうもないよ。」

「じゃあ、わたし、まだパートに出た方がいいのね。」

「うん、すまない。でも、キスぐらい、おまえ・・。」

凡子は目で抵抗して、

「簡単に、させてあげられるもんですか。2000 年初期の頃とは、違うんだから。」

沙羅男は、ふーっ、とため息をついた。それから独り言のように、

「あーあ。おれも 2013 年頃に生まれていればなー。そうしたら、もっと簡単にキスもできたし。」

「そんな、いやらしい事、夫婦だからって気楽に話さないでくださいな。その頃のキス映像は、すべて成人指定のアダルトになってるでしょ。今は。」

「そうだけどね。昔の人達は、気楽だね。」

「ずいぶんと昔だわ。公務員も勤めていれば、給料が上がったそうじゃない。」

「そうだったらしいね。役人天国だったんだろうな。でも、今はそれも違うね。おれの同級生も地方公務員になったけど、リストラされてね。」

「大変ねー。」

「風俗産業に入って、今は安定した生活を送っている。」

凡子は眼をきらめかせると、

「そうだ、あなた。風俗関係の仕事に転職なさいよ。自動車の会社なんているから、だめなのよ。何十社もあるでしょう、車の会社。」

「ああ、でも、日本の一つの基幹産業ではあるから、大学出のおれとしては・・・。」

「面子なんて、拘る事はないじゃない。キスもできないわ、あなたと。」

沙羅男は、俯いて、

「もう少しの辛抱だよ。そうすれば、おまえと思う存分、キスをして・・。」

「いやらしいなあー、でも、ワクワクする。夫婦ですものね、わたしたち。」

「そうだよ。凡子。」

というある家庭での夫婦の会話であった。

2020年頃から日本の少子化には拍車が、かかっていた。2030年頃には深刻な問題となっていき、2040年には日本の人口は七千万人ほどになってしまった。

そこで、それまでも日本の医学界で研究がつづけられていたあるものが、ついに完成したのだった。

それは、手術によってキスにより射精をするという方法が可能になるものだ。その代わり、その男は性器からは射精できなくなる。問題は女性もそうなのだが、口から精液を飲み干す事によって妊娠可能となる手術をうける点にある。

第一回目の手術は国で募集したところ、三十代の子供のいない夫婦が六組と少なかったが、手術後にこの六組の夫婦はみんな子供を授かったのであった。

その事は、日本のみならず大変なニュースとして世界に広がった。この全く新しい手術を考案した縦木元太郎(たてき・もとたろう)博士は、京都大学新人類開発室の所長であったが、その年のノーベル賞受賞者となり、時の人となった。

六組の夫婦の成功は、六千の夫婦の応募、六万の夫婦の応募と広がっていった。

驚くべき事に、これらの新しい受胎法を手術で獲得した夫婦の子供は、うまれつき男女ともキスから妊娠することが

できることが分かった。のみならず、従来の太古より行われてきた性行為はできないことも判明した。

この新人類の男性は、女性器に興味を示さない。乳房にも無関心だ。では何に興奮するかといえば、女性の唇にのみ性的関心を持つのである。

世界的にも徐々にではあったが、少子化が進んでいた。先進国日本では急激な勢いであった。それで、キスによる妊娠が可能となる手術を望む夫婦が増えていった。何せ、手術代は国が負担するのだ。

そのために消費税は、どんどんと増えて、その頃は日本が世界で一番高い消費税の国となっていたのだが、人口問題に使われる消費税には誰も反対しなかった。

そのように新人類ともいえる男女の増加が進むと、手術をしない方が何か引け目を感じられる世の中とはなっていった。

バイアグラ、レビトラなどのサプリメントも、この新人類には必要ない。

やがて日本で、この新しい人達が六割になった時に、アダルト産業も新たな展開を迎えた。四割の手術を受けない人達のために、女性器の映し出された映像、出版物、その頃の出版物は電子書籍が全体の九割、が解禁となった。

この事については、国会で論議され可決されたものである。それでも国の風紀が乱れる事もなかった。六割の男性は、女性器に興味を持たなかったからだ。又、六割の女性は妊

娠への入り口とならない女性器を恥らう事もなくなっていた。

日本ではあちこちと、夏になるとヌーディストビーチが現れ始めた。全裸で日光浴する若い女性。唯一つ、覆っているのはマスクだけ。口だけを隠していれば、あとは恥ずかしくもないのだ。

又、不思議とこれらの女性の体は色気がない。

ある夏、まだ手術をうけていない四割の方の男子会社員、二十五歳は一人でヌーディストビーチを見学していた。少し離れた場所から、双眼鏡で覗くのだ。彼がいるのは、小山の斜面で緑樹に覆われている。

(こんな光景が日本でも見られるようになったとはな。くくく、)

と思いつつ、双眼鏡を色々とずらせて下の砂浜に寝そべっている若い女性の全裸を堪能した。が、自分のイチモツは反応しなかった。どの女性も口にはマスクをしている。

(ちぇっ、噂どおりに立たないよ。自分も手術を受けて、あそこにいる誰かとキスしてみたいな。)

と暮れいく太陽を見ながら思うのだった。

手術を受けた新人種は、七割にも日本では到達した。その頃、とうとう映倫やそれに類する検閲機関では、女性の唇にボカシを入れない映像を認めなくなっていた。

又、従来のアダルト映像にあったスカートめくりは、マスクめくりに変わっていた。これもマスクが取れて女性の唇

が映し出されるのは、許可されないのでモザイクをかける

ようになったのだ。

ついに七割の小学生の女の子が、マスクをして登校するよ

うになった。

ストリップ劇場でも、手術を受けた女性か、その子孫の女

性は全裸を見せたが口には厚いマスクをしていた。